



## 縄文時代の京都

はじめに

京都府内の縄文遺跡の発見は、明治時代の末から大正時代にかけて、京丹後市はこいしはま函石浜遺跡や京都大学構内のきたしらかわおぐらちょう北白川小倉町遺跡に始まります。しかし、東日本のように畑に縄文土器が散らばっているような遺跡はほとんど無く、遺跡が加速度的に増えたのは、1980年代以降、開発に伴う発掘調査が増加してからです。

縄文時代の時期区分

約2万年前、最後の氷河期（ヴェルム氷河期）が終わり、山や海を覆っていた氷が溶け、海水面が上昇し、徐々に日本列島が現在の形に近づいていきました。気候の温暖化により西日本ではカシ・シイなどの照葉樹林帯に、東日本はクルミ・トチなどの落葉広葉樹林帯が広がっていきました。旧石器時代の人々は、捕獲したケモノの肉や堅果物を生で食べるか、火にあぶって食べていました。しかし、縄文時代の人びとは粘土を焼いて「土器」を作り始めた結果、肉や堅果物を煮て食べるようになるようになりました。これが縄文時代の始まりです。

縄文時代とは、土器の使用が始まって以後、中国・朝鮮半島から稲作文化が伝来し、日本に稲作が定着する弥生時代までの、およそ1万年余りの期間を



縄文時代のムラの想像復原図（早川和子作画）

# 縄文時代の京都

います。1万年を越える長期間の縄文時代は、ムラの様子や道具の進歩、土器の模様や形態の変化から、草創期、早期、前期、中期、後期、晩期の6期に区分されています。

ある遺跡が縄文時代のどのあたりにあたるのか（相対年代）は、土器や石器の形態から推定できますが、土器や石器だけではそれが今から何年前なのか（絶対年代）を明らかにすることはできません。そこで、近年は理化学的な方法（C<sup>14</sup>年代測定法、熱ルミネッセンスなど）や火山灰などで年代を推定したり測定したりしています。

京都府内では、京丹後市松ヶ崎遺跡で見つかった縄文時代前期前半の炭化物が5,600～5,800年前、舞鶴市浦入遺跡で見つかった縄文時代前期後半の丸木舟が5,260年前という年代が得られています。また、亀岡市案察使遺跡では、およそ10,700年前、韓国の鬱陵島が噴火し、それにより堆積した鬱陵隠岐火山灰層の下から縄文土器が出土し、縄文時代早期前半のものであることがわかりました。

## 縄文土器

縄文時代と旧石器時代の違いとして、まず土器の使用があります。人類史上最初の化学変化を利用した発明とも言われる土器は、日本ではその表面に縄目の文様がよく付けられることから、「縄文土器」と呼ばれ、この時代の名前にもなりました。その文様や器



舞鶴市志高遺跡の縄文土器

形の変化が、遺跡の時期を決める一つの物差しになっています。

京都府内で最も古いと考えられている縄文土器は、福知山市武者ヶ谷遺跡のむしやがたに小形の鉢です。府内出土の草創期の土器はこの1点だけで、早期前半

のものも、案察使遺跡と京都市西ノ京南上合町遺跡みなみかみあいちょうの2か所が知られるに過ぎませんが、早期後半から遺跡の数は増えていきます。

「縄文土器」と言われるように、縄目の文様は各時期に多用されますが、縄目以外の文様もあります。棒に楕円や山形の文様を刻んで土器の表面に転がした押型文おしがたもんや竹管などを押し付けた爪形文つめがたもん、貝殻を使った文様など多種多様です。

縄文時代も終わりに近づくと京丹後市平遺跡へいの土器のように、文様をつけない土器が多くなります。

土器の効用は、食物を煮ることにより、食べられる動植物の種類が飛躍的に増加したことです。また、煮沸することで殺菌効果が得られ、人々の健康にも大きく寄与したものと考えられます。

### 縄文のムラ

人々が同じ場所に長く住み始めるのも縄文時代からです。生活条件の良い所では、家は何軒か建ち並ぶ集落（ムラ）が形づくられました。ただ、縄文時代早期の段階では、南九州などきわめて限られた地域だけで大規模な集落が存在しますが、多くの地域では数軒の住居が並ぶ小規模なムラであったようです。温暖化が進み、食糧採取が安定した前期になると大規模なムラが多くなります。ムラは中央に広場があり、その周りを囲むようにたてあなしきじゆうきよ竪穴式住居



浜詰遺跡の復元竪穴式住居（京丹後市教育委員会提供）



竪穴式住居の想像復原図

# 縄文時代の京都



石囲い炉をもつ竪穴式住居跡（伊賀寺遺跡）

<sup>へいちしきたてももの</sup>や平地式建物が造られ、イエの背後や外周部には貝塚（ゴミ捨て場）があったようです。また、ムラの中やあるいはそのそばに墓や<sup>さいし</sup>祭祀施設が造られるようにもなります。

縄文時代後期になると地域を代表する大規模なムラ

<sup>きよてんしゅうらく</sup>（拠点集落）とその周辺に分散する小規模なムラに分かれていたようです。

京都府で現在見つかっている最も古い住居跡は、京都市上<sup>かみはてちょう</sup>終町遺跡の早期後半のもので、平面形が長径 2.8 m の楕円形でした。

縄文時代中期～後期の長岡京市伊賀寺遺跡では 50 基程度の竪穴式住居跡が見つかり、そのうちの一部には石囲い炉が組み込まれていました。中期末から後期の京都市日野谷寺町遺跡では 3 基の石囲い炉と共に食物を保管する<sup>ちよぞうけつ</sup>貯蔵穴があります。

舞鶴市桑飼下遺跡では、住居に伴ったと考えられる 48 か所の炉跡が残っていました。同時に何軒の家が建っていたかはわかりませんが、当時としては、相当大きな集落だったようです。

木津川を見おろす台地上にある城陽市森山遺跡では、後期中頃の住居跡が 8 基みつかり、公園として保存されています。

京都大学構内では、中期末の住居跡や後期の<sup>どきかんぼ</sup>土器棺墓と<sup>はいせきぼ</sup>配石墓が点々と発見されています。

京都市西京区上里遺跡で晚期中頃の集落が見つかりました。円形や楕円形の住居と近くに<sup>どこうぼ</sup>土壙墓や土器を利用した土器棺墓がありました。土器棺墓は京丹後市平遺跡や山城地域の京都市山科区中臣遺跡、宇治市寺界道遺跡、向日市<sup>てらかいどう</sup>鶏冠井遺跡、長岡京市<sup>なかとみ</sup>馬場遺跡、大

山崎町下植野南遺跡などで  
も見つかっています。

### 食物の狩猟と採取

氷河期である旧石器時代にはオオツノジカやナウマンゾウなど大形のケモノがいましたが、旧石器時代の終わり頃にはこのようなケモノは絶滅し、ニホンシカ・サル・イノシイ・ウサギな



石斧使用例

ど、今の私たちが目にする小形動物が中心となります。

舞鶴市志高遺跡は、由良川の自然堤防上のムラですが、地表下4mから前期の住居跡が見つかり、当時の豊富な生活道具が出土しました。獣や魚を獲るための矢の先端に着ける石鏃<sup>せきぞく</sup>や皮をなめしたり木を削ったりする万能小刀の石匙<sup>いしざじ</sup>、魚網に使った石錘<sup>せきすい</sup>、家の柱や丸木舟を作る樹木を切り倒すための磨製石斧<sup>ませいせきふ</sup>、土を掘る打製石斧<sup>だせいせきふ</sup>、食料の木の実や地下茎などを磨り潰すための磨石<sup>すりいし</sup>と石皿<sup>いしざら</sup>など、大小様々な形のもが使われていました。

食料にした動植物や骨角および植物で作った生活用具は、腐るためほとんど残りませんが、京丹後市松ヶ崎遺跡では、地中で水に浸かり空気に触れなかったため、腐らずに残ったものがありました。その中のエゴマなどは栽培されていたとも考えられています。

かつて自然の恵みに頼るだけと考えられていた縄文時代の食糧ですが、近年の調査によって、小規模ながら食用植物の栽培や実のなる樹木の管理も行われていたと考えられるようになってきました。季節に応じた食糧を得て、保存食を作り、それを交易品として、陸路・海路を通じて他地域と交流していた姿も浮かび上がります。

(長谷川 達)